

他社が真似る商品をつくり続けた シャープの創業者・早川徳次翁の事績を訪ねて

〈取材協力〉シャープミュージアム（奈良県天理市櫛本町2613-1）

「誠意と創意」を経営信条として掲げるシャープは、それを体現した偉大な創業者を持つ。過酷な少年時代を送った早川徳次翁（1893-1980）は「シャープペンシル」を発明。関東大震災ですべてを失ったが、再び立ち上がり、日本ではじめてのラジオ、テレビ、電卓…を次々と生み出した。このシャープのDNAを社員や取引先に伝えてきたシャープミュージアムの藤原百合子さんは、2016年、台湾に渡り、シャープに資本参加することになった鴻海グループの人々に、徳次翁とシャープの100年来の発明を紹介するとともに、「誠意と創意」そのものだった創業者の事績を伝えた。そのときの人々の感激ぶりは藤原さん自身を感動させ、みんなで「誠意と創意」を体現していく大切さをあらためて思ったという。

■生い立ち

早川徳次翁は、1893（明治26）年、東京日本橋のちゃぶだい製作業、早川政吉とミン縫製の仕事をしていた花子の末子として生まれた。生後1年11ヵ月のとき母・花子が結核に罹患。乳が出なくなり、徳次を



シャープミュージアム・藤原百合子さん

育てられなくなって、深川東大工町の肥料業、出野熊八・おらく夫妻のもとに養子に出された。4歳のとき、養母・おらくが急逝し、熊八が後添えに迎えたおまつは徳次につらく当たった。十分な食事を与えなかったうえ、熊八との間に生まれた2人の子の世話を押し付け、さらに朝早くから夜遅くまでマッチ箱のレッテル貼りの内職を強いた。尋常小学校も1年しか行かせてもらえなかった。近所の井上長兵衛・おせい夫妻がそれを見かね、徳次のためには丁稚奉公に出して腕を磨かせたほうがいいと助言してくれ、1901（明治34）年、8歳を前に、本所区北二葉町でこうもり傘の金具づくりをしていた鋳屋の坂田芳松の下で丁稚として

働くことになった。熊八宅から奉公先までの1時間足らずの道のりを、盲目のおせいに手を引かれながらの門出だったという。

■丁稚奉公

徳次が最初に命じられた仕事は、朝一番のランプのほや磨き、6キロ離れた日本橋の地金屋から重い地金を背負って帰ってくる仕事、そして粉炭をキネでついてアラズミをつくり、それを荒縄につけて地金を磨くという仕事だった。やがて、先輩たちの仕事を見ながら、^{かざり}鋳職人としての金属加工の技能を少しずつ身につけていった。

この頃、教育制度改革で小中学校が増え、鉛筆の需要が急増した。主人の芳松はそれを知って鉛筆製造業への参入を目指し、借金して鉛筆製造機械を導入、さらに新たに数人の小僧を雇い入れた。しかし、十分な品質の鉛筆をつくることができず、財産を差し押さえられ、小僧たちは四散し、徳次と2人の兄弟子だけが残った。気落ちした芳松は、^{ろう}鑑づけ用の石油ランプを袖口にひっかけて倒してしまい、大火傷を負った。

徳次は、キズ物の鉛筆を夜店で売って、芳松を助けた。先輩たちはやがて店を出ていったが、徳次は7年7ヵ月の年季奉公とその後1年間のお礼奉公の後も鋳屋にとどまり、職人として芳松を支え続けた。

■^{とく びじょう}徳尾錠とシャープペンシルの発明

1912（大正元）年、19歳の徳次は、洋服



早川徳次翁肖像

のベルトにつけるバックル「^{とく びじょう}徳尾錠」を開発した。それが特許になり、本所林町の商人、巻島喜作が33グロス（4752個）を注文してくれた。

この頃、徳次は養父・熊八が保管していた^{ようし し}養嗣子契約書を見て、自分の実父母が早川政吉と花子であることを知った。つてをたどって会いに行くと、実父母はすでに亡くなっていたが、兄と姉は健在で、兄姉たちは再会を喜び、大いに歓迎してくれた。そのことに勇気づけられた徳次は、鋳屋からの独立を決意。徳尾錠の販売代金とその上に巻島が出資してくれた資金で、本所松井町に民家を借り、プレス機を買い入れ、2人の職人を雇い入れて、徳尾錠の製作、万年筆クリップの製作、万年筆キャップへのリングの取り付け、水道自在器の製作など、緻密な金属加工の仕事を次々と引き受けた。本所松井町の工場はすぐに手狭になり、そこを引き払って新たに本所林町に工場を建てた。

1914（大正3）年、巻島の媒酌で文子と



早川式繰出鉛筆
(シャープペンシル)

結婚した翌年、徳次は後に「シャープペンシル」と呼ばれる早川式繰出鉛筆を発明した。徳次がはじめた事業に、兄のまさはる政治が営業担

当として加わることとなり、「早川兄弟商会」の看板を上げた。繰出鉛筆は当初、どこへ持っていっても誰も振り向いてくれなかったが、銀座の文具店・伊東屋が関心を示してくれ、そのアドバイスで改良を重ねたことで徐々に売れるようになり、特に横浜の商館から輸出用の注文が入るようになった。さらに関西総代理店の福井商店（現・ライオン事務器）の福井正太郎氏の勧めもあり、それを「エバー・レディ・シャープ・ペンシル」（後にシャープペンシルと呼び慣らわす）と名づけたことも加わって、爆発的に売れるようになった。

■関東大震災と大阪移転

シャープペンシルの需要に応えるために、林町のほか、押上と亀戸にも工場を建て、コンベアによる流れ作業工程も導入して量産体制をつくった。雇い入れた従業員は200人に達した。

そんな中で、1923（大正12）年9月1日、

関東大震災が起こった。徳次自身は無事だったものの、地震後に東京中を焼き尽くした火事によって妻と2人の子供は帰らぬ人となった。工場も焼け落ち、徳次は一日にしてすべてを失った。

失意のどん底にあったまさにそのとき、シャープペンシルの関東方面の販売委託先だった日本文具製造という大阪の会社が、特約の解消を通告してきた。日本文具製造はそれだけでなく、同時に特約金1万円と事業拡張資金として貸与していた1万円、計2万円の即刻返金を求めた。最も苦しい時期に突き付けられた過酷な要求だったが、徳次は悩んだ末に、早川兄弟商会を解散し、シャープペンシル事業と48種類の特許のすべてを日本文具製造に譲渡することを決めた。シャープペンシルが大阪の日本文具製造の下でつくられ続けるのなら、行き場を失った従業員の働き場が確保できると考えたからだった。

徳次自身も住まいを大阪に移して、日本文具製造が大阪ではじめるシャープペンシル事業が軌道に乗るまで技術指導し、9ヵ月後にそれが軌道に乗ったことを確かめて、日本文具製造を退社。1924（大正13）年、現在の大阪市阿倍野区長池町に工場兼事務所を建て、「早川金属工業研究所」の看板を掲げ、再び万年筆の付属金具やクリップの加工の仕事をはじめ、早川兄弟商会時代の従業員も少しずつ戻ってきた。これが後の電機メーカー「シャープ」となっていく。

■ラジオの製作

シャープペンシルに代わる仕事を探し求めていた徳次は、翌、1925（大正14）年に、ラジオ放送が開始されることを知り、心斎橋の石原時計店で、アメリカ製の鉱石ラジオ受信機を入手した。それを分解し再び組み立てることで構造を理解し、あるいはモールス信号を打電し、ダイヤルを回して周波数を合わせ、その音をとらえてラジオの原理と仕組みを研究・理解して、やがて、国産鉱石ラジオ受信機第1号を組み立てた。

「シャープ・ラジオ」は1925（大正14）年のラジオ放送開始と同時に、月産1万台のペースで生産され、売り出された。4年後には、ついに性能は外国製にも劣らず、価格は1/10を実現した交流式真空管ラジオ、5年後にはスピーカーを箱の中に内蔵したボックス型ラジオを発売。ライバルの松下電器がラジオの生産に乗り出したのは、シャープの5年後、1930（昭和5）年のことだった。

徳次は海外展開にも積極的であり、1934（昭和9）年には販路拡大のためにシャープの初の海外出張所となる上海に、その後も、台北、ソウルに出張所を開設して輸出にも力を注いだ。1941（昭和16）年には、従業員数は1000人に及んだ。

■テレビ、電子レンジ、電卓…の開発

シャープ・ラジオ発売の翌年の1926（大



鉱石ラジオをテストする早川徳次翁（右）

正15）年、浜松高工（現静岡大学工学部）の高柳健次郎助教授が日本ではじめてブラウン管に「イ」の字を映し出した。ラジオのニュースでそのことを知った徳次は「テレビジョン研究のために卒業生を求人したい」とのハガキを浜松高工に送り、それがきっかけで笹尾三郎がシャープに入社して、テレビジョンの研究をはじめた。

シャープ（当時は早川金属工業）は、日米開戦と同時に陸軍航空本部監督工場に指定され、笹尾ら技術者たちは「雲平器」と呼ばれたレーダーの研究に従事した。やがて敗戦を迎え、戦後の一時期、テレビの研究はGHQによって禁じられていたが、解除されて2年後の1951（昭和26）年、シャープは戦時中のレーダー研究の成果を生かして、いち早くテレビジョンの試作品を完成させ、その後、小型で安価なテレビジョンの供給を主導した。

徳次はその後、1960（昭和35）年にIBM650を導入して、若手技術陣にコンピュータの研究を命じた。1961（昭和36）年には中央研究所を開設して、笹尾三郎を初代所



国産テレビ第1号

長に任命。その中央研究所の成果をもとに、1962（昭和37）年に日本ではじめて電子レンジを量産し、そして1964（昭和39）年には世界初の卓上電子計算機が誕生した。電卓はその後、アメリカのアポロ宇宙計画の中で生まれたLSIを搭載して、手のひらに乗るまでに小型化・軽量化された。1970（昭和45）年には中央研究所を天理に移し、最先端の半導体工場をここにつくった。この年、早川電機工業は社名を「シャープ株式会社」に変更。徳次は社長から会長に退いた。

徳次のシャープ（早川電機工業）は常に他社に先んじた開発・商品化を目指した。ライバルの松下電器がトップを行くメーカーの弱点を修正して安定的な製造販売を目指す2番手商法に徹したのと対照的だった。

■人材の蓄積

少年時代の徳次は厳しい境遇にあったが、そんな中で、自分を導いてくれた人々を徳次は最後まで気遣い、大切にした。養父・熊八の一家は、震災前に従業員のため

に亀戸に建てた5軒長屋の1軒に住まわせ、管理人の仕事を委嘱していたし、鋳屋の芳松は、妻に先立たれて1人になっていたとき、引き取って一緒に暮らした。亡くなったときは西田辺の工場に「恩師坂田芳松告別式」の看板を掲げて、取引先や社員の参列の下で社葬した。

小学校にも十分に行けなかった徳次は、独学でさまざまな知識を身につけた。キズ物の鉛筆を夜店で売っていたときには、ビール箱に腰かけて客待ちしながら、書物を開き、その文字を鉛筆で書き取りながら文字を覚えたという。そうした体験から若いうちにきちんと勉学に励むことの大切さを痛感し、自分の工場で働く人たちに勉学の機会を与えるために1937（昭和12）年、私立早川商工青年学校を設立した。後にシャープは「信用・資本・奉仕・人材・取引先」の「5つの蓄積」を社是として掲げたが、早川商工青年学校の設立は、まさにその中の「人材の蓄積」を目指したものだだった。

■特選金属工場

徳次の丁稚奉公への道筋をつけ、奉公先まで手を引いて見送ってくれた盲目のおせいについては、徳次は、その後、何も返せていないうちに彼女が関東大震災で行方不明になってしまったことがずっと気がかりだったという。

そんな思いでいた1940（昭和15）年のある日、西田辺のシャープ本社近くにあっ

た大阪盲人協会（後の日本ライトハウス）の創設者、岩橋武夫から講演依頼を受けた。視力を失った人たちの前で電気の話をしてほしい。できれば実演もやってほしいという。徳次はそのとおり電気の話と実演をやって見せたが、それがきっかけとなり、日本ライトハウスの礼拝堂の中に機械を入れ、シャープ（当時、早川電機工業）の分工場として、視力障害者たちの手で無線機の部品の一部をつくることになった。この工場は1950（昭和25）年に合資会社特選金属工場（現・シャープ特選工業）として独立し、視力障害者たちだけで運営されるようになった。

失明者による特選工場をつくったことで、徳次は大阪府身体障害者雇用促進協議会の会長に推され、1954（昭和29）年には、



視覚障害者だけで運営された特選金属工場

従業員の家族や西田辺の近隣住民のために、育徳園保育所をつくって自ら園長に就任した。1962（昭和37）年には、創業50周年を記念して、大阪市に設計図を添えて早川福祉会館を寄贈している。

1980（昭和55）年、ロータリーの新年例会に出席した帰り、徳次は突然に脳梗塞で倒れ、半年後に86歳で永眠した、通夜の晩、最初に弔問に訪れたのは松下幸之助だったという。

※本稿の執筆に当たっては次の資料を参考にしました。シャープホームページ・創業者早川徳次（<https://corporate.jp.sharp/info/history/voice/>）／平野隆彰著『シャープを創った男・早川徳次伝』（日経B P社、2004）

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後、産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し、改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立、『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動を取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「仕事の事典」をネット公開中